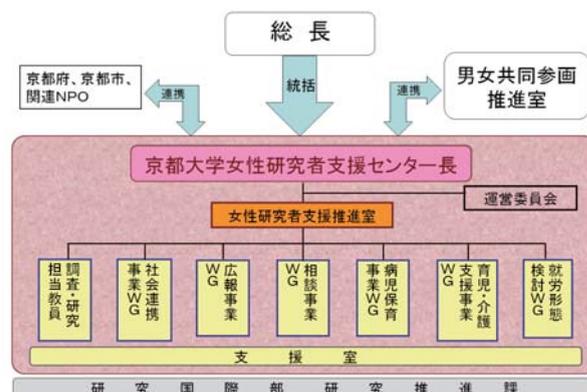


女性研究者支援センターの組織が変わりました

2011年4月1日、女性研究者支援センターでは、ワーキンググループの名称、役割を再検討し、組織・実施体制を変更しました。

稲葉 カヨ 女性研究者支援センター長、伊藤 公雄 女性研究者支援推進室長のもと、広報事業、相談事業、育児・介護支援事業、病児保育事業、就労形態検討、社会連携事業の6つのワーキンググループと支援室、そして、研究国際部研究推進課により、各事業を企画・運営していきます。

今後とも、センター活動へのご支援、ご協力をよろしくお願いたします。



■ワーキンググループの事業内容と委員

ワーキンググループ名	事業内容	主査・推進員
広報事業 ワーキンググループ	学内外における広報・啓発活動	(主査) エネルギー科学研究科・助教 山末 英嗣 (推進員) 工学研究科・助教 村山 留美子 (推進員) 生存圏研究所・准教授 小嶋 浩嗣
相談事業 ワーキンググループ	カウンセラーによる女性の抱える 悩み相談 メンター事業の推進	(主査) 理学研究科・教授 西村 いくこ (推進員) 理学研究科・准教授 秋山 秋梅 (推進員) 理学研究科・助教 野口 順子
育児・介護支援事業 ワーキンググループ	育児・介護支援事業に関する企画・ 実施 育児・介護に関する情報の収集と 提供	(主査) 工学研究科・助教 齋藤 啓子 (推進員) 医学研究科・教授 富樫 かおり (推進員) 学術情報メディアセンター・教授 喜多 一 (推進員) 総合博物館・教授 岩崎 奈緒子 (推進員) 医学研究科・助教 鈴木 和代 (推進員) 工学研究科・教授 神吉 紀世子 (推進員) 工学研究科・助教 安枝 英俊
病児保育事業 ワーキンググループ	病児保育室（感染隔離室含む）の 事業運営 保育事業に関するサポート	(主査) 医学研究科・教授 足立 壯一 (推進員) 医学研究科・教授 富樫 かおり (推進員) 医学部附属病院・助教 土井 拓 (推進員) 医学部附属病院・助教 粟屋 智就 (推進員) 医学部附属病院・助教 長尾 美紀 (推進員) 医学部附属病院・看護師長 辻岡 まゆみ (推進員) 医学部附属病院・看護師長 井川 順子 (推進員) 医学部附属病院・地域ネットワーク医療部 隈村 綾子 (推進員) 医学部附属病院・総務課長 千葉 正勝 (推進員) 研究国際部研究推進課・課長 川口 泰史
就労形態検討 ワーキンググループ	研究・実験補助者の雇用制度の実 施（研究実験補助者雇用制度実施 グループ） 柔軟な就労形態構築へ向けての検 討（アンケート調査等企画実施グ ループ）	(主査) 地域研究統合情報センター・教授 押川 文子 (推進員) 情報学研究科・教授 佐藤 亨 (推進員) 医学研究科・教授 鈴木 眞智子 (推進員) 法学研究科・教授 横山 美夏 (推進員) 地球環境学堂・准教授 小畑 史子 (推進員) 文学研究科・GCOE 助教 今田 絵里香
社会連携事業 ワーキンググループ	次世代及び市民に向けての啓発・ 教育活動	(主査) 教育学研究科・教授 鈴木 晶子 (推進員) 高等教育研究開発推進センター・教授 松下 佳代 (推進員) 低温物質科学研究センター・教授 寺嶋 孝仁 (推進員) 工学研究科・教授 松原 英一郎 (推進員) 理学研究科・准教授 久家 慶子 (推進員) 農学研究科・准教授 赤松 美紀

京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と研究発表

優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)の第3回目の表彰式を、3月3日に開催しました。たちばな賞には、学生部門8名、研究者部門6名、合計14名の推薦があり、京都大学に置かれた優秀女性研究者賞選考委員会(委員長 吉川 潔 研究担当理事。委員11名で構成)における第一次および第二次選考を経て決定しました。学生部門の受賞者は、工学研究科博士課程3年の北村 恭子さん、研究者部門の受賞者は、医学研究科准教授の濱崎 洋子先生と決まりました。



表彰式前には、受賞者、総長・理事、センター長との懇談がありました。研究内容だけでなく、研究に向かう姿勢や、環境などについて、短い時間ではありましたが、和やかな雰囲気の中で、話がはずみました。

表彰式は、稲葉 カヨ 女性研究者支援センター長の司会で進行しました。

最初に、吉川 潔 理事・副学長より、開会の挨拶がありました。選考委員長でもある吉川理事からは、選考委員会における選考経緯についての報告を交えた、話がありました。

次に松本 紘 総長より、学生部門受賞者の北村恭子 工学研究科博士後期課程3回生、研究者部門受賞者の濱崎洋子 医学研究科



准教授に、それぞれ表彰状と記念楯が授与されました。会場からの大きな拍手の後、松本総長から、祝福の言葉と受賞者への更なる活躍を期待するエールが送られました。研究を継続していくことの大変さにも触れ、研究成果については、大変な努力と研鑽のたまものであるとの話がありました。



表彰に続いて、受賞者による研究発表を行いました。北村さんよりは「フォトニック結晶レーザーによる極限的微小集光の形成」についての発表がありました。レーザービーム形状や偏光状態の制御によって、より小さな集光点を得るための研究プロセスを紹介し、ナノテクノロジーでの実用を将来展望としてあげました。

濱崎准教授からは「胸腺組織上皮細胞の発生・分化と自己免疫寛容成立機構の解明」についての発表がありました。免疫応答において重要な役割を担うT細胞の分化の場である胸腺の上皮細胞にクローディングが発現することを見出し、自己免疫疾患に関する研究を進めていること、そしてそれは、自己免疫疾患の治療につながるという話がありました。



最後に、塩田 浩平 理事・副学長より、京都大学の男女共同参画の推進に触れて閉会の挨拶があり、盛況のうちに閉幕となりました。(支援室)



日本学術会議の動き 講演会「学術における男女共同参画推進の加速化に向けて」

平成23年3月2日(水)日本学術会議主催講演会「学術における男女共同参画推進の加速化に向けて—アンケート調査結果の分析をてがかりに—」が開催されました。

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野約84万人の科学者を内外に代表する機関として、内閣総理大臣の所轄の下、政府に対する政策提言、国際的な活動、科学者間ネットワークの構築、科学の役割についての世論啓発を行っています。科学に関する男女共同参画についても、科学者委員会の下に男女共同参画分科会を設置して活動を展開してきました。



平成19年には、学術分野における男女共同参画の現状と課題を明らかにするために、国・公・私立大学705校を対象とした初めての大規模なアンケート調査を実施し提言「学術分野における男女共同参画促進のために」(平成20年7月)を公表しました。アンケートから3年が経過した昨年には第2回アンケートが実施され、このたび、調査結果を受けて講演会が行われました。

はじめに、金澤一郎(日本学術会議会長)、岡島敦子(内閣府男女共同参画局長)、板東久美子(文部科学省生涯学習局長)各氏のご挨拶があり、基調講演「第4期科学技術基本計画と男女共同参画」(相澤益男・総合科学技術会議議員)が行われました。そして、「第2回日本学術会議男女共同参画アンケート調査結果から—全国国公立733大学を対象に—」(山本眞鳥・江原由美子:日本学術会議第1部会員)及び「大学における男女共同参画政策の推進(現状と課題についての事例報告)」が行われました。

国立大学法人については京都大学 稲葉カヨ教授(女性研究者支援センター長)が事例報告を行いました。また、私立大学については、早稲田大学 棚村 政行教授が、私立大学連盟の動向報告を、公立大学については、大阪府立大学 田間 泰子教授が、同大学の事例分析を含め報告を行いました。最後に、質疑・討論が行われ、岡島男女共同参画局長もフロアからコメントをするなど、盛会のうちに講演会は終了しました。

(女性研究者支援センター 犬塚 典子)

平成22年度「京都大学における男女共同参画に資する調査研究」研究成果発表会

女性研究者支援センターと本学GCOE拠点「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」は、平成20年度より「京都大学における男女共同参画に資する調査研究」研究ユニット企画募集を実施してきました。2月23日(水)、GCOE拠点主催による平成22年度研究成果発表会が開催され、浅井歩特定助教(本学宇宙総合学研究ユニット)を代表とする「子育て中の親を対象とするアウトリーチ活動のニーズ調査」などの報告が行われました。

質疑では、GCOE研究推進担当者から、各調査研究の質が年々上がっていること、ワークライフバランス事業のモデルとして成果を発展させていく可能性などについてコメントが寄せられました。平成23年度も研究ユニットの企画募集を行っています。



連載：研究者になる！－第31回－

運は必要、でもチューンナップを忘れずに
人間・環境学研究科・教授 水野眞理

私が京大文学部の英米文学科に籍を置いたのは、英語が好き、本が好き、という、いかにも女子学生にありがちな理由からであった。卒業後は、高校の教師になろう、と考えていた。教員免許を取得する科目をとり、4回生の夏に教員採用試験を受けて、赴任校も決まった。あとは卒論を提出するだけだ。



と、ここへきて卒論を書けない、というピンチに陥ったのだ。今から思えば当然のことなのだが、私は英語のお勉強が好きで女の子に過ぎなくて、文学研究のことなど何も分かっていなかった。20世紀初頭の小説家ジェイムズ・ジョイスを扱った私の卒論は内容も貧乏ければ、英語の文章も間違いだらけで、出した瞬間に撤回したくなるような代物だった。このとき人生で初めて劣等感を抱き、もう少し大学にいられたら、と願った。そうしたら少しは文学部出身らしい人間になれるのではないかと。

赴任が決まっていた高校にはお詫びを入れ、娘が社会人にならないことにながかりした親にも頭を下げて、私は大学院に進学した。もちろん院生になったからといって、急に文学がわかったわけではないが、研究対象をルネサンス期の英文学に変え、少しずつ、読み、論じることの楽しさを感じられるようになっていった。これが自分の仕事になるのだろう、と思い始めたのは博士課程に進学してからである。

ところで、私の人生にとって「運」は大きな要素である。この頃に同じ英米文学科で後に夫となる人と付き合い始め、それぞれの留学、博士課程修了後のオーバードクターなどを経て、30歳で結婚した。結婚前の予想を大きく裏切って、夫は家事、育児全般にわたって私以上の負担をしてくれた。また夫とは当時から今まで、論文や口頭発表の原稿を最初に見せあっている。私たちは生活を共にするだけでなく、お互いの研究をもっとよく理解しあえるパートナーだと思っている。

結婚と同時に、京都市内の大学の二年任期の研修員に採用され、給料らしいものをもらえる身分にはなったが、任期内に何とか専任のポストをつかむことが必要だった。募集があるたびに応募し、落ちまくっていたころ、当時の京大教養部の先生から、英語教員のポストに応募するよう勧めていただいたのだ。このように、「研究者になる」には運は大事な条件だと思う。ただし忘れてはならないのは、運が向いてきたとき、その運をつかめるような状態に自分をチューンナップしておくことだ。これは恋愛でも、就職でも変わらないと思う。

その後、夫も京大教養部に赴任してきて、私たちは、同僚夫婦になった。これを受け入れてくれた京大の懐の深さには今でも感謝している。夫婦が同僚だと何でも話が早いのはよいのだが、会議のある日は二人ともが家を空けなければならない。息子が幼い頃、教授会の日にはベビーシッターを頼み、息子を幼稚園や学童保育から大学の研究室へ連れてきて保育してもらい、会議が終わると三人で手をつないで帰る、ということをしてきた。学会に子供を連れて行き、夫と私が別々の部屋で口頭発表している間、小学生の息子が聴衆の間にちょこんと座っていたこともある。

このような経験から、若い研究者たちが育児の時期を乗り切るのを手助けしたいと思い、最近ある英文学の学会の役員会の席で、「学会託児」を提案した。学会は保育所や学童が休みの週末に行われることが多い。そのために参加を諦めるだろう若い世代こそ、業績を積みたい世代でもあろう。理系の諸学会では託児制度が普及しているのに、文系ではまだまだである。私は、面倒くさいことを言い出す委員だ、という他の委員の表情を予期していたが、思った以上に席上の反応は好意的であった。ただ、中には「理系は女性研究者が少ないから、それを増やすようなスタンスを見せることが、男女共同参画というお題目に叶い、国の科学技術振興政策の恩恵を受けやすいのだ」と皮肉な見方をする男性委員もいた。これが実情なのかどうかは私にはわからないが、たとえどのような動機であったとしても、託児制度のある学会のほうが、そうでない学会よりずっといいだろう。

自分自身は何となくここまで来たが、決して才能や努力の結果だとは思わない。周囲の人々や運に助けられて来たのだ。だから今度は私が若い人々を手助けする番だと思っている。

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>